

コーヒーブレイク



ドイツ演奏旅行

会員 萩原 園子 (62期)

バッハゆかりの地

「教会」というと、どんな場所をイメージするだろうか。今年の5月、私はドイツの伝統ある教会でヴァイオリンを演奏する機会を得た。東京J. S. バッハ合唱団がバッハゆかりの地で合唱する際、オーケストラ伴奏要員として同行したのである。バッハの生地であるアイゼナハから、バッハが晩年を過ごしたライプツィヒ、「生涯をそこで終えるつもりであった」というほど充実した時を過ごしたケーテンの三都市をまわり、バッハゆかりの教会で演奏してきた。

音楽が心に響く

最も印象に残ったのはケーテンのアグヌス教会での演奏会である。合唱団がアンコール曲として用意してきた「野ばら」を歌おうとした時、教会の音楽監督（オルガニスト）が突然、教会参列者に向かって「一緒に歌おう」と提案した。この一声で、日本の合唱団とドイツの教会参列者が、ドイツ語で一緒に野ばらを歌ったのである。その歌声、ハーモニーは今でも忘れられない。よくドイツ人と日本人は気質が合う（真面目なところだろうか）、と言われる。ケーテンでの野ばらはそれがまさに歌に表れており、何とも言えない一体感と優しい空気が教会中を包んだ。私は、遠く離れた異国の地で、言葉も分からない者同士が一体となる瞬間に初めて触れた。「音楽が心に響く」とはこういうことを言うのだろう。こんな素敵な体験は、きっと後にも先にも今回だけであろうと思う。

ドイツの教会

冒頭の質問（教会のイメージ）に対する私の答えで

Deutsch-japanisches Begegnungskonzert:
BWV4
Christ lag in Todes Banden
BWV68
Also hat Gott die Welt geliebt
BWV540
Toccat und Fuge F-Dur
Organistin: Martina Apitz
BWV227
Jesu meine Freude

J. S. Bach Chor
Tokyo, Japan
Dirigent:
Seiya Takahashi
St. Agnus-Kirche
Köthen
Orgel/Chorleitung:
Martina Apitz

Mittwoch, 7. Mai 2014
19.30 Uhr
St. Agnus-Kirche Köthen
Stiftstraße 11, 06366 Köthen/Anhalt
Eintritt frei (Spenden willkommen)

あるが、今回の演奏旅行に行くまでは正直、「真面目で少し暗く、静かな場所」であった。ところが、ドイツの教会は想像と全く異なるものだった。

太陽の光が差し込む明るい作りで、装飾や色遣いも実に豪華・鮮やかである。教会の鐘の音が鳴り響くと、参列者はパイプオルガンに合わせてイキイキとした表情で讃美歌を歌っていた。良い意味で教会の概念を覆され、すっかりドイツの教会にはまってしまった。

3つの教会で演奏するにあたり、最も苦勞したのは音量の調節である。ヨーロッパの教会は、その構造上、とにかく音が良く響き、また教会ごとに響き方が全く異なる。本番直前の1回のリハーサルで楽器間・合唱との音量バランスを調整することはとても大変であった。

ドイツの教会は実に個性豊かであった。

ヴァイオリンが結ぶ縁

私は3歳からヴァイオリンを始めたので、気づいた時にはヴァイオリンを弾いていた。高校卒業後は、しばらくヴァイオリンをケースの中で休ませていたが、弁護士1年目に偶然にも木村真一会員（東弁のヴァイオリニスト）にお会いする機会があり、法律家を中心に結成された「アンサンブル・フォウ・ユウ」に誘っていただいた。これにより私の音楽生活が再開したのである。ちなみに、今回のドイツ演奏旅行のオーケストラは、「アンサンブル・フォウ・ユウ」のメンバーが中心であった。

ヴァイオリンのお蔭で、法曹界の音楽仲間に出会い、ドイツにも行くことが出来、音楽でドイツ人と心を通わせることまで出来た。ヴァイオリンに感謝である。